

## 戦後の繁栄とともに

昭和24年5月、文部省令により、東京音楽学校は東京芸術大学音楽学部と改称され、戦後の大学制度のもとで新たな歴史を刻むこととなった。

音楽学部が発足して以降、演奏会のあり方にも変化があらわれ始めた。最も重要なことは、学部で主催する各ジャンルごとの定期演奏会が充実してきたことであろう。これは戦後の混乱のなかから、徐々に平和と安定を取り戻し、やがてめざましい勢いで繁栄へと向かっていく国内情勢と合致する現象である。新たな制度のもとで再出発した大学は、各分野の専門教官を迎え、それぞれに学生を受け入れて学生数が増加していった。しかし、戦後の音楽界の復興・発展は、単にこのような体制の問題や数字の上からだけでは論じられるものではない。私立の音楽大学が着実に育ってきたとはいえ、唯一の官立の音楽大学として期待されるころは大きく、戦後もなおその責任を背負って歩むことになる。第3部で取り上げる演奏会資料の数々は、戦後の音楽界のごく一部の証言に過ぎないが、そこには音楽に対する当時の人々の熱い想いが綴られている。いま、創立100周年記念演奏会までをひと区切りとして振り返ると、戦後の本学音楽学部の演奏会は、かつての東京音楽学校創設当時に勝るとも劣らぬ熱意に育まれてきたことが窺われる。

本百年史『演奏会篇』はこれまで編年体の方法をとってきた。しかし音楽学部となって以降、演奏会の種類と回数が以前に比べて大幅に増えているため、第3部においては、ジャンルごとに章を設け、定期演奏会、卒業演奏会、メサイア(救世主)演奏会、特別演奏会その他、最後に創立100周年記念演奏会の順で、それぞれの流れを追うことにする。演奏会の各年ごとの横の関係については、巻末の補遺「演奏会一覧」をご覧ください。

ただきたい。

以下、第3部で取り上げる演奏会資料について簡単に触れておこう。第1章は定期演奏会である。

定期演奏会をジャンル別で開始順に並べると次のようになる。

### 1. オーケストラ

明治31年12月の第1回定期演奏会以来活動を続けてきたオーケストラは、戦況の悪化した昭和18年に「軍用機献納披露」という名目で第101回を行って以来中断していたが、昭和24年12月、6年ぶりに第102回定期演奏会の再開にこぎつけた。

### 2. 吹奏楽

昭和26年10月に定期演奏会が始まり、着実な活動を続けている。

### 3. 邦楽

邦楽科は、音楽学部発足当時はその存続が懸案となっていたが、翌25年4月に東京芸術大学学則が施行される際、新たに設置された。そして昭和28年6月、音楽学部邦楽科としての第1回定期演奏会が行われた。

### 4. オペラ

昭和31年4月、ニコラ・ルッチ氏の指導を仰ぎ、第1回公演として「椿姫」が行われた。明治36年(1903)の「オルフォイス」上演が大評判となり、風紀上の問題で物議を醸して以来の記念すべき公演となった。(明治36年の「オルフォイス」演奏会については、『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第1巻の541～552頁を参照のこと。)

### 5. 室内楽

昭和49年11月に第1回が行われた。昭和47年に室内楽の講座が置かれ、その成果を広く世に問う機会として設けられた。

第3部第1章では、内容の整理上、まず戦前から続いているオーケストラの演奏会を取り上げ、ついで吹奏楽、オペラ、室内楽の順に洋楽の定期演奏会をまとめ、最後に邦楽を置くこととする。

第2章は卒業演奏会である。これは音楽学部としては、年度末の重要

な行事であるが、そのあり方は少しずつ変わってきた。本書では昭和28年から47年までを取り上げる。詳細は第2章の説明をご覧ください。

第3章はメサイアである。昭和26年、50回連続演奏を掲げたメサイア慈善演奏会の第1回が行われ、年末恒例の行事となっている。平成4年12月にはこの演奏会も42回目を迎えることができた。

第4章は、定期演奏会以外の重要な演奏会を取り上げる。ガムランのように最近になって始まった演奏会もこの章で扱う。

第5章は創立100周年記念演奏会である。本学音楽学部は昭和62年10月に創立100周年を迎え、5月から11月にかけてさまざまな形で100周年を記念する演奏会が開かれた。この章では100周年記念演奏会のシリーズ全7回とその関連資料、さらに昭和62年度に行われた定期演奏会を取り上げる。ただし、メサイアのように主旨の異なる演奏会については、それぞれのジャンルで扱う。

次に、第1部、第2部では扱ってきたが、第3部では取り上げない演奏会についても触れておく。

ひとつは出張演奏である。東京音楽学校時代から引き続き、大学オーケストラおよび学生オーケストラによる演奏が、今日まで盛んに行われている。大学となってからも、戦前同様、各地の学校の創立記念演奏会に出演したり各地の学校や教育委員会の要請に応じて出かけている。また最近では各学校や団体から鑑賞教室で生演奏を聴かせたいとの希望が多く、数年先まで予約の詰まっている状況である。大学としてもカリキュラムの一環としてこれを受け入れる体制をとり、一定の枠内でこなしている。このように、出張演奏は、長年にわたりわが国の音楽文化の振興の一端を担ってきたが、東京音楽学校時代とは異なり、公開の演奏会としての意味が薄れているので、ここでは取り上げない。

もうひとつは学友会主催の演奏会である。学友会の活動は今日なお盛んであるが、東京音楽学校時代のそれとは趣を異にしている。今日の学友会は、音楽学部学生による学生全員加入制の自治組織で、芸術大学祭（通称：芸術祭）や四芸術大学体育・文化交歓会（通称：四芸祭）をは

じめ、演奏活動に限らず、学生の課外活動や他大学との交流などを広く支援している。しかし音楽学部としての各種の演奏活動が頻繁に行われるようになった現在、演奏会に関しては、かつての音楽学校時代ほどの目立った動きは見られないので、これも第3部では割愛する。

なお、曲目解説と歌詞は、初演など特別の場合をのぞき省略した。また、プログラム中の挨拶文やメッセージ、エッセイなどを省略する場合には\*を付してタイトルと執筆者のみ記した。

## 第1章 定期演奏会

昭和24年～63年3月（1949～1988）

### 第1節 オーケストラ定期演奏会

オーケストラ定期演奏会は、昭和18年12月に「軍用機献納披露」と冠する第101回の定期演奏会を開いてから、6年ほど中断していた。戦況が悪化し、演奏会どころではなくなっていたのである。演奏会に関する記録が乏しく、学内でのプログラムの保存状態も最悪の時期であった。この空白の年月が語るところは想像を絶するものがある。

昭和24年12月、奏楽堂において第102回が再開の運びとなった。この演奏会は音楽学部誕生の年に行われた唯一の公開演奏会である。制度上は音楽学部となっているが、実際には東京音楽学校の教職員・生徒と合同で行われている。プログラムに「東京藝術大学東京音楽学校管絃樂團並びに合唱團」と印刷されているのはそのためである。第102回定期は、渡邊曉雄指揮でショパンの〈ピアノ協奏曲第2番〉とモーツァルトの〈レクイエム〉が演奏されたことになっている。ただし曲目と出演者に